

日本語文法(史的研究)

福沢 将樹

今期注目される著作として野田尚史／小田勝 [編]『日本語の歴史的対照文法』(和泉書院)がある(以下特に断らない限り「本論文集」)。現代の日本語と過去の日本語を「対照研究」という発想は、かつて近藤泰弘「文法研究における現代語と古典語」(『国文学解釈と鑑賞』55(7)、1990)もあった。これらは、「通時的研究」や「一般言語学的研究」とは異なるものであると思われる。

係り結びを焦点表示機能として見るアプローチは、琉球語との対照などここ数年来盛んであり、本論文集でも野田尚史「現代語と古代語の「係り結び」——焦点表示機能と主題表示機能を視野に入れて——」がある。しかし従来から気づかれていたように、これらのアプローチではヤについては上手く説明することが難しい。ヤについて本論文集では林淳子「話し手の行為について問う文——疑問文の歴史的対照の試み——」において扱われている。但し対照の相手は中古語が中心であり、上代語の木下正俊「斯くや嘆かむ」論については言及に留まっている。今後の展開が期待される。また菊田千春「複合構文としての係り結び——通時的構文文法及び機能主義的類型論からの再考——」(『認知言語学研究』6)は分裂文からのアプローチである。

かつて大野晋からいわゆる「倒置説」が唱えられた時、これは一種の分裂文説であり主題・焦点表示機能説であったが、一部ネガティブな評価が強かった。タミル語にも係り結びがあると主張された時、国語学者の多くは耳を傾けなかつただろう。『係り結びの研究』(岩波書店、1993)において主張された2系列・2類の体系は、論としては失敗していると評者(福沢)も思うが、しかし、係助詞になぜ似た意味のものが複数あるのかという問題設定には見るべきものがあつたはずである。現在大野の仕事はどれだけ継承されているだろう。大野の再評価・名誉回復が必要ではなからうか。

福嶋健伸「アスペクト研究における形式と意味の関係の記述方法を問い直す：～テイルの発達を踏まえて」(『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2』ひつじ書房)では、「○○という形式は、△△(という意味)を表す」という記述の仕方(表現)の根本的問題を論じる。ここには記述の手法の違いがあり、即ち「一般言語学的な手法」「個別言語学的な手法」「言語類型論的な手法」にはそれぞれ一長一短があり、このことに論者は互いに自覚的である必要があるという指摘がある。

その他、『筑紫語学論叢Ⅲ』(風間書房)、『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集』(ひつじ書房、2冊組)などの論文集、「小特集 訓点資料研究に期待すること」(『訓点語と訓点資料』146)、櫻井豪人 [企画担当・講師]「日本語史研究における洋学資料の活用例」(日本語学会2021年度秋季大会)、山田敏弘「国語教育で役立つ日本語文法を考える」(日本語文法学会第22回大会)、高山善行『日本語文法史の視界：継承と発展をめざして』(ひつじ書房)なども目に入ったが紹介する余裕がない。なお一部編者名や副題を省略した。

(愛知県立大学)